

《記録》

杉本星子，小林大祐，西川祐子編『京都発！
ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』
(昭和堂，2015年)をめぐって

高度成長史研究会（第5研究）

西川祐子

庄司俊作

開始の一言（庄司俊作）

それでは研究会を始めたいと思います。今日は、西川祐子先生らがまとめられた『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします 向島からの挑戦』（昭和堂，2015年）を取り上げて、議論したいと思います。このような形式で研究会を持つのは、昨年の上とし『鐘紡長浜高等学校の青春』に次ぎ二回目ということになります。

「輝ける町」も「オールドタウン」も、本書の帯にある言葉です。オールドタウンには「いま社会問題山積の」という形容句が付いています。ニュータウンの歴史と現状の本質的問題を的確にとらえたネーミングであると思います。フレーズにすると「かつての夢の街は、いま問題山積のオールドタウンに！？」となります。

本書は、専門を異にする多くの研究者の共同研究の成果であり、現状分析か、歴史研究かと問えば、明らかに現状分析の本です。また、編者らを中心とした長年にわたるニュータウンの共同研究、個人研究をもとにまとめられています。小難しい研究書ではなく、現にニュータウンで生活する人びとを含め、ニュータウンが抱える社会問題に関心を持つ多くの市民を読者に想定した、そしてそれら多くの市民と一緒に考え討論してみたいという、あくまでいわばローアングルの姿勢で書かれた啓蒙の書です。

このような本の読み方としては読者にもそれなりの構えというものが求められるでしょうが、著者のみなさんに失礼にあたるのではないかと恐れつつ、思い切って本書を

ニュータウンに関する歴史の本として読んでみたいと思いました。その問題意識を一言でいうと、要するにニュータウンを通して日本の高度成長というものをとらえ直したいという思いがあります。本書でニュータウンの歴史が具体的に分析されているわけではありませんが、西川先生が執筆された第1章や終章を読むと、世界的視点と日本の高度成長を踏まえた歴史の視点でニュータウンが論じられています。また、今日は新たに本高度成長史研究会が目標とする「高度成長の社会史」をニュータウンの歴史との関連で論じていただけることになっています。「輝ける町からオールドタウンへ」という時間軸を意識した表現は歴史家でなければいけないものです。

今日は、西川先生とともに本書を編集された京都文教大学の杉本星子、小林大悟の両先生にもご報告をお願いしました。また、それを受けて、研究会の安岡健一、今井小の美両氏からコメントをしていただきます。少し時間的にタイトですが、活発な議論ができれば幸いです。

ニュータウンの社会史序論

西川 祐子

1 はじめに

高度経済成長研究会で杉本星子、小林大祐、西川祐子編『京都発！ ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』（昭和堂、2015年）を書評に採り上げていただくことに感謝いたします。高度経済成長研究会については、代表者である庄司俊作先生が「高度経済成長の社会史を描く」ことを目指すと書かれていたと思います。今日の私の役割は次の二点です。一つはこの本を書評していただくにあたって皆さんとごいっしょに改めて「ニュータウンとは何か」について考えることと、もう一つは本研究会のテーマである高度経済成長研究とニュータウン研究が結びつくのはあたりまえですが、両者のテーマをできるだけ具体的に関連づけるのが私の役割かな、と思っています。

この本の三人の編者の報告ですが、まず私は導入部担当ということで、ニュータウンについて一般論を簡単にお話します。つぎに杉本が向島ニュータウンとグリーントウン填島に根ざした京都文教大学のニュータウン共同研究についてお話します。そして小林がニュータウンにおける社会問題の解決にむけて共同研究が長年かかわってきた具体的な実践について詳しく報告します。京都にあるんだけど、そんなに知られているわけで

はない向島ニュータウン、グリーンタウン填島で住民自身によって何が行われてきたかをご報告したいと思います(写真1参照)。今日の研究会の目的は、皆さんに書評をしていただくこと、討論をいただくことですから、編者たちからの報告はできるだけ簡潔にします。

2 世界人口の増加及び人口移動の加速化とニュータウンとの関係。

わたしが京都文教大学で授業していたある日、一人の学生が教壇にまでやってきて、「今日、世界人口が60億を超えたんだよ、知ってる?」と私に言いました。私は「今日」というのにまずびっくりして「あなたは どうして、そんなことがわかるの?」と問い返しました。すると彼はポケットからiPhoneのご先祖のようなものを出して「今日60億人を超えたというニュースがさっき画面に流れた」と言いました。と、いうことは、彼は私の授業はきいてなかったのかもしれませんが(笑)。後で調べますと、世界人口の60億突破は、国連人口部が1999年10月12日に発表されています。ところがこれには修正がなされ、前年の1998年にすでに60億人を突破していたということになりました。私は世界人口30億のニュースは1960年頃だった、とかすかに覚えていたものですから、ほぼ40年後には、それがもう30億増えて、60億人つまり倍になったということに深く驚きました。因みに世界人口70億到達は2012年です。21世紀末までには100億突破とい

写真1 向島ニュータウン、38回目の紅葉



出典:『京都発!ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』口絵写真 p.1.

う予想もあるそうです。少子化で国力が下がったから女性はもっと子どもを産め、という掛け声は高いのですが、それは一国だけで考えていることではないか。このスピードで私たちが全地球の資源を食いつくしてゆくとどうなるんだろう、と誰しもが考えることではないかと思えます。

急激な人口増加を「人口爆発」と形容しだしたのは20世紀後半になってからではないかと思えます。第二次世界大戦後です。しかし人口爆発は瞬間に起こるのではなく、産業革命以後の生産システムの激変と、やがて高度経済成長と呼ばれる社会変動が生命の再生産活動にも影響を及ぼした結果でありましょう。人口増加は実は女性の産む子どもの数というよりはむしろ乳幼児死亡率が減る、個人の寿命が伸びることにも大いに関係します。人口増加にひきつづき、世界の人口移動は加速を増しました。農村部から工業地帯へ、都市へと人口移動の波は潮のようにさしてはひき、をくりかえしながらも、しだいに都市へと人口が集中、さらに都市から都市へ、また都市から植民地へ、植民地から別の都市へ、大陸から大陸へと、移動は加速します。交通と通信手段の発達で移動をたやすくしました。ニュータウンはこのような急激な人口流入によって膨張した都市人口の受け皿として多くは都市の周辺に、また工業地帯に建設されることになる人工都市あるいは計画都市の呼称です。

3 ニュータウンの定義

ニュータウンは最初、「新都市」と直訳されていたのですが、やがて「ニュータウン」とカタカナ表記になります。個人でニュータウン研究をするのはなかなか難しい。ニュータウンは学際研究、学問領域横断型の研究でないとアプローチが難しいたくさん問題を抱えていると思います。京都文教大学のニュータウン研究会は、学内・学外の社会学、文化人類学、女性史、ジェンダー研究、臨床心理学、建築史、建築学、都市計画など多領域の研究者を迎える共同研究でした。研究成果は、さまざまな大学の研究会、学会のワークショップやシンポジウムで報告し、他の学術研究機関の共同研究ともリンクする試みをやってきました。

文化人類学会大会でニュータウン研究をかかげて分科会をもらい、幾つもの報告を行った際に、報告者のあいだでニュータウン概念を共有する必要から作ったのが以下の定義です。

ニュータウンは出自を異にする人々が居合わせて住む人工的な計画都市であり、

国土開発の枠組みのなかで戦略的プランニングに基づいて創出された空間設計のパターン化がみられる。

このときは将来, ニュータウンの国際比較をする時にも役立つような定義を考えようとなりました。じっさい, 各社会のニュータウン建設ブームとその衰退は各社会が世界市場へ参入する時間差を反映します。世界市場に参入する時期が遅い国ほど経済成長カーブの傾斜が強くなる傾向があると思います。グッと上がってグッと下がる。各社会の高度経済成長の曲線をグラフに表すなら, 参入時期と同じくピーク時に, そして衰退にも, 時間差があることが明らかになるでしょう。ニュータウン建設は先進諸国からはじまって, 世界中に広がってゆきました。ニュータウンの衰退もまた, 各社会の高度経済成長の衰退に数年おくれつつ起こるわけです。

では1960年代から入居が始まる日本型ニュータウンは世界的傾向のどのへんにいるか。おおざっぱに言えば, 真ん中あたりではないかと思います。日本住宅公団史を参照してみると, 1975年までは, 欧米の集合住宅やニュータウンを見学するために職員が海外出張をしています。日本型モデルを確立した1975年以後となるとアジア, アフリカへの出張が多い。どうもその時代以降は技術指導というか日本型モデルの輸出が使命となる。ただしどの社会も先進国事例を参照し技術を輸入しながら独自のバージョンをつくる。集合住宅やニュータウンモデルにも日本型, 韓国型, 台湾型が創出されました。

4 ニュータウンの変容

このように高度経済成長は伝播してゆくが, その後には衰退がつづく。戦争とおなじく高度経済成長もまた背後に焼け跡や廃墟を残すのではないのでしょうか。日本型ニュータウンは急激な高度経済成長に対応するためにベッドタウン建設をいそぐ傾向がありました。たとえばイギリスの田園都市建設は20世紀前半ですが, ベッドタウン建設だけでなく産業誘致も考慮する時間的余裕があった。日本型ニュータウンにはそれが許されなかったのではないのでしょうか。ベッドタウン化すると職住分離化と性別役割分担制度がつよくなります。日本型のニュータウンの計画時には, 経済成長がつづくという楽天的な見通しのもと, 都市計画に「住宅双六」が組み込まれました。賃貸集合住宅1Kから始めたとしても, 2K, 3DK, 3LDKと年功序列にともなう収入の上昇にふさわしい住宅へと住み替え, やがて分譲住宅を獲得するはず。住宅双六の上がりやの庭付き戸建て住宅でした。

しかし右肩上がりが恒久的に続くというわけにはいかないわけで、双六を順調に上がっていく人たちがいる一方、ある段階で止まる人もいる。「沈殿層」などというひどい言葉が、行政語だったのですが、そんな言葉がつくられたりしました。階層移動速度が次第にぶくなり、格差が広まって固定されてゆく。特に公営住宅は入居条件に収入制限がつけられて以来、一定の収入になると出ていかなければならなくなる。公営住宅が、たちまち福祉住宅化していくという問題が発生します。

ニュータウンには同世代一斉入居が多いため、高齢化が全国平均より約十年早く進みます。高齢化はどの階層、どの街区にもある傾向です。賃貸住宅に高齢者が多いと同時に、戸建て住宅地区にも高齢者のひとり暮らしが増えています。丘の下の大型スーパーが撤退したとたん丘の上の戸建て住宅の住民が買い物難民となる例もあります。しかし、ニュータウンで起こっているこれらの社会問題は十年後には日本社会の全体に起こることの先取りだと考えるべきではないか。

私たちの共同研究は、ニュータウンを社会全体の先端部分と位置付けることにしました。追い詰められた空間で生きる追い詰められた住民たちが始めた試みを記録して、そこに参加することからニュータウン研究を始めました。私たちの大学だけではなく、20世紀の末に設立されたいわゆる新設大学の多くはニュータウンと同じ郊外に位置しているわけで、私たちが共同研究をやっている間、他の大学からの見学や傍聴も多くありました。京都文教大学のニュータウン研究のいいところはひたすら持続、続けてきたことかなと思います。今日はここでいろんな示唆をいただいて、それをもって帰った時、聞いてもらえる仲間がいるということが一番幸せだと思っていますので、ご意見をどうぞ、よろしくお願いします。

高度経済成長と向島ニュータウン

杉本星子

1 京都の二つのニュータウン

日本のニュータウンは、高度経済成長期の工業化によって都市に集中した労働者のベッドタウンとして建設されました。向島ニュータウンもまた、その例外ではありません。それでは、向島ニュータウンの特徴はどこにあるのでしょうか。初めに向島ニュータウンの特徴と歴史を概説してから、向島ニュータウンと京都文教大学のつながり、向

島ニュータウンに形成された住民のネットワークについてお話し、最後に現在、向島ニュータウンが抱える課題について考えます。

向島ニュータウンの特徴は、第一に高度経済成長期の京都南部の地域開発の一環として建設されたこと、第二に、これまでもニュータウン研究が多くなされてきた多摩ニュータウンや千里ニュータウンのような大規模ニュータウンではなく、日本各地にたくさんあるにもかかわらずあまり研究が蓄積されていない中規模ニュータウンの一つであること、そして第三に京都南部の巨椋池干拓地につくられたという独特の立地条件にあります。

1970年代、京都では、市街地の南西に洛西ニュータウン、南東に向島ニュータウンが、ほぼ同時期につくられました。十年くらい前、「郊外問題」が議論されるなかで、「よい郊外」「悪い郊外」という言葉が流行ったことがあります。洛西は「よい郊外」で、向島は「悪い郊外」というイメージで語られたりしました。背景には、古墳群があり竹林が広がるのどかな農村地帯に開発された洛西ニュータウンと、かつて水質汚染で知られた大池の干拓地に建設され、久御山工業団地にも近い向島ニュータウンという、土地の歴史があります。着工して間もなく洛西ニュータウンには、老舗デパートの高島屋が入るラクセーヌというショッピングセンターや、行政の主要施設が集中するタウンセンターがつくられました。大学も、京都市立芸大のキャンパスが移転してきます。2005年に「洛西ニュータウンまちづくり検討会」ができますが、そこには行政が入り、学識経験者が入り、もちろん住民も入りました。そして市の予算もかなりつきました。現在、「洛西マルシェ」などのまちづくり活動が行われていますが、まちづくり検討会はそうした住民活動の出発点となっています。ただ、洛西には、当初計画されていた地下鉄の建設は実現しませんでした。一方、向島には、当初計画されていなかった近鉄の駅ができました。しかし、大きな商業地区はつくられませんでした。向島でもまた、2005年からまちづくりの活動が始まりますが、それは、葬儀場建設に対する住民の反対運動から出発しました。向島に隣接する槇島地域に京都文教大学ができ、後に地域交流拠点もできましたが、そこにも行政は関与していません。同じ時期に始まったまちづくり活動にも、京都市の都市計画における両ニュータウンの位置付けの違いが影を落としているのです。

2 向島ニュータウンの立地

向島ニュータウンが立地する巨椋池干拓地は、桂川、木津川、宇治川の三川が合流するところにあった大きな池の跡地です。秀吉が堤防をつくり川の流れを変えた後、大き

な遊水池となり、漁業が営まれていました。しかし、明治元年に木津川が決壊したことから、宇治川の流れをつけかえる工事が行われました。ところがその結果、水の流れが滞って水質が悪化し、漁獲量が減ってマラリアも発生しました。そこで、1933年（昭和8年）から1941年（昭和16年）、国の食糧増産事業として国営第一号の干拓事業が計画され、ポンプ排水によって634haの干拓田ができ、周辺1260haの既存耕地も改良されて、巨大な水田地帯がつくられました。しかし、1953年（昭和28年）、台風の豪雨で堤防が決壊し、大水害が起こります。これがきっかけで、1964年（昭和39年）宇治川上流に天ヶ瀬ダムがつくられました。その後、ダムによって水量の調整ができるようになり、かつての遊水地も今や安全な場所になったと判断され、次第に宅地化が進んでゆきました。そして、ニュータウンと工業団地が造成されたのです。しかし、巨椋池干拓地はポンプ排水による干拓ですから、排水が止まれば、すぐにもとの遊水地に戻ってしまう土地です。これが、後に述べる、現在のニュータウンの防災問題に繋がってゆきます。

3 ニュータウン人口の増加と住民の分断

向島ニュータウンは、市営住宅、公団分譲住宅、公団賃貸住宅から構成されています。ニュータウンが完成して入居が始まると、最初に向島南小学校（現二の丸北小学校敷地）ができました。次に、その分校として二の丸小学校ができ、藤ノ木小学校ができ、そして二の丸北小学校ができました。ニュータウンの人口が増えるにつれて、どんどん小学校が分化していったわけです。そのなかで、市営住宅街区の小学校と、公団分譲住宅街区の小学校というように、住民の社会的階層の違いが、学区のちがいとしても視覚化され意識されるようになりました。ニュータウンの内部は、街区を基本とした学区によって、分断されていったのです。さらに、建設途中で計画が変更され、公団分譲予定地の大きな部分が市営住宅地に計画変更され、京都駅南地区の再開発によって移転を強いられた住民や、後には、中国からの帰国者の移入の受け皿となりました。

同時に、ニュータウンを取り巻く旧村地域の住民と、新たに移入してきたニュータウンの住民もまた、小学校区の違いで完全に分断されてしまいました。そもそも、ニュータウンは都市計画上、外周道路によって構造的に周囲の地域と分断されているのですが、向島ではさらに、ニュータウンと旧村地域をつなぐ水路にかかる橋の数が、極力少なくされたと伝えられています。干拓地に耕地をもつ旧村の農家の人たちと、そのほとんどがサラリーマンである団地の住民では、ライフスタイルもまったく違いました。旧村の人たちにとっては、知らない人がたくさんやって来るのが怖かったといえます。こうし

で向島ニュータウンは、空間的にも社会的にも周辺地区と分断され、またその内部も、街区によって空間的にも社会的に分断されるという都市構造ができあがったのです。

やがて高度経済成長期が終わり、ニュータウンは成熟期から変動期へと移行しました。先に西川が述べましたように、高度経済成長神話の破綻と共に「住宅双六」もまた破綻し、初期の一斉入居以来ニュータウンに残った人々が、そのまま「沈殿層」として高齢化していくという状況が起きてきます。高齢化率が上がり、多文化化が進むとともに、さまざまな社会問題が浮上してきました。

そこに、2005年、駅前に葬儀場建設計画がもちあがりしました。そうした状況に対して、住民たちが「何とかしなくては」と立ち上がり、「向島駅前まちづくり協議会」が結成されました。初めて、ニュータウンの住民たちが、街区を越えて結びついたので。2008年、京都文教大学の学生の一人が、駅前に掲げられていたまちづくり協議会の趣旨に賛同して、住民たちに協力を申し出ました。それがきっかけで、学生と住民たちがいっしょに「向島駅前春の祭典」を始めました。こうして、京都文教大学とニュータウンの住民たち協働のまちづくりが始まりました。

4 向島ニュータウンと京都文教大学

向島ニュータウンの住民と京都文教大学との関係は、大きく三期に分けられます。第一期は、文科省科学研究費助成金基盤研究C「ニュータウンにおけるジェンダー変容」(2001年—2004年)と京都文教大学人間学研究所共同プロジェクト「ニュータウンの未来像」(2003年-2005年)をとおして、京都文教大学の教員たちがニュータウン研究会を立ち上げた時期です。日本各地のニュータウンを訪問し、ニュータウンをどのように学問的に捉えるかを模索しました。2003年くらいから授業の中でニュータウンの「絵はがきづくり」を実施し、共同研究で「住まいの個人史」の聞き取りを始めることで、少しずつ向島ニュータウンに入っていました。

第二期には、人間学研究所共同プロジェクトの「ニュータウンのある『まち』—地域における大学の役割に関する実践的研究」(2006年-2008年)、「リバイビング・ニュータウン—住民主体のコミュニティ再活性化に向けた研究」(2009-2011年)と、共同研究を継続しながら、住民と学生が始めた「春の祭典」に教員たちも参加するようになり、さらに「新鮮な野菜を食べたいから朝市やってほしい」とか「フリーマーケットをやってほしい」といった住民の声にこたえて、「向島わくわく朝市」、「向島ほっこりフェスタ」をやるなど、教員と学生がゼミ活動を通して地域にかかわっていきました。その結果、大

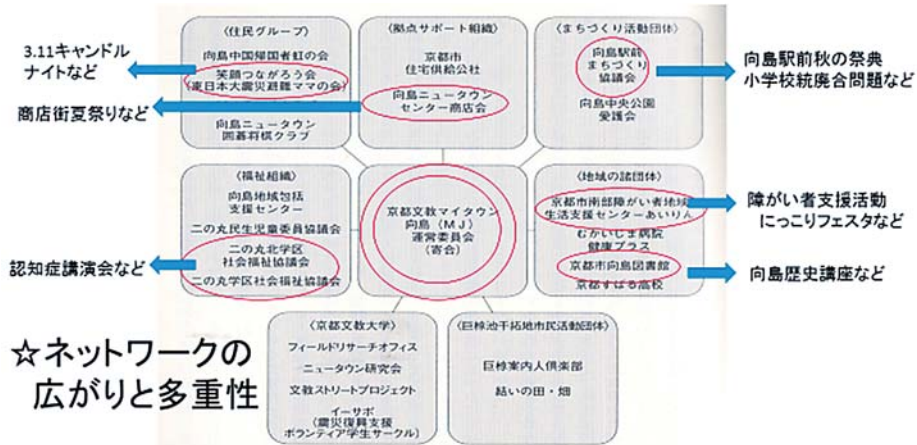
学と地域住民，商店街，そして地域のさまざまな団体がつながっていきました。そうしたなかで，京都市住宅供給公社と大学が協定を結び，大学が向島ニュータウンセンター商店街の空店舗を借用して，地域交流拠点を開設することになりました。

こうして2013年1月，「京都文教マイタウン向島（MJ）」がオープンし，大学と地域の連携が本格化しました。これ以後，現在までが第三期ということになります。2014年から，京都文教大学地域研究協働教育センター共同研究「京都南部・向島地域のニュータウンにおける大学・住民協働のまちづくり研究」（2014年-2016年）による，教員と住民の共同研究も進められています。

5 向島ニュータウンの住民ネットワーク

向島ニュータウンの地域交流拠点「京都文教マイタウン向島（通称 MJ）」を中心に広がるネットワークの概要は，次ページの図のようになります。

図1 「京都文教マイタウン向島（通称 MJ）」を中心に広がるネットワークの概要



MJを拠点に，一人暮らしの高齢者を対象とした「ランチクラブ」，子どもの貧困対策を念頭においた小学生向け「向島学ぼう会」や「キッズキッチン」，「雛祭り」や「プラレール大会」といった季節行事が行われています。しかし，重要なことは，住民ネットワークの中心がMJ一つではないということです。例えば，向島ニュータウンセンター商店街を中心に恒例の商店街夏祭りが実施され，東日本大震災による避難者が中心となって3.11メモリアル・キャンドルのイベントが行われています。向島駅前まちづくり協議会は，毎年，秋の祭典を主催していますが，今は小学校統廃合問題にも取り組んで

写真2 キッズキッチンの子どもたち



小林大祐撮影。

います。京都南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」は、障がい者支援活動を展開するとともに、障害者と健常者をつなぐ「にっこりフェスタ」を行なっています。また、学区の社会福祉協議会が中心となって認知症の講演会などが行われていますし、向島図書館は地域の歴史講座を定期的で開催しています。私たちニュータウン研究会のメンバーが意図的に仕掛けていったというところもあるのですが、さまざまな地域の諸団体がそれぞれの企画やイベントを実施しながら、互いに協力しあうネットワークが広がっているのです。さらに加えて、向島ニュータウン駅前まちづくり協議会、二の丸北・二の丸学区民生児童委員協議会に向島包括支援センターや、向島消防署や伏見区福祉課、街区自治会などの代表、そして京都文教大学の教員も参加し、月に一度、地域の社会福祉問題に関する情報を交換する「向島安心安全ネットワーク会議」があります。

先に、向島ニュータウンは、空間的にも社会的にも街区で分断され、社会格差が視覚化される構造になっていると申しましたが、こうしたネットワークをとおして街区を越えて分断を横断していくような動きが作りだされてきています。こうして生まれたネットワークの重層性が、向島ニュータウンのまちづくりの大きな特徴になっていると思います。

6 向島ニュータウンの課題と今後の展望

最初に述べましたように、向島ニュータウンは、高度経済成長期に想定された近代家族の「夢」のライフスタイルを実現する居住空間として計画されました。したがって、高度経済成長の夢が潰れるとともに、それ自体が孕んでいた問題が浮上してきました。その第一は、他の地域より一歩早く進んでいる高齢化と少子化問題です。また、向島ニュータウンは、高度経済成長のもう一つの側面、すなわち市街地の再開発がもたらした低所得者の移動、そして高度経済成長後の社会格差の拡大と子どもの貧困問題、公営住宅の福祉住宅化による要支援者の増加という課題も抱えています。第二は、日本の経済成長が誘因となった中国帰国者の親族やニューカマー外国人の増加による多文化化の進行です。この第一、第二の問題は、第三の問題である地域防災の問題ともつながっています。巨椋池干拓地に開発された向島ニュータウンは、天ヶ瀬ダムがあるといっても、地震や大雨によって宇治川が決壊すれば一階部分が水没するような地域です。そのときに高齢者、障がい者、そして中国帰国者や外国人といった災害弱者をどうサポートするかという問題は、深刻です。

向島ニュータウンでは、現在、このような問題に取り組むとともに、それらをもたらししている地域の特徴を、必ずしもマイナスとはとらず、むしろプラスに活かしていく方向性が模索されています。例えば、多文化共生地域であることを活かして、外国の人にも地域で動いてもらうようと、アジア・アフリカ映画祭をやって留学生に映画解説をしてもらったり、地域の祭りで中国帰国者に中国の踊りや二胡の演奏をやってもらうといったように、彼らに舞台上がってもらう機会をつくっています。また、障がい者のように、一般に「弱者」と呼ばれ、今まで支援される側にいた人たちが「自分たちも働かせる」といってくださり、「それでは働いてもらいましょう」ということで、地域のバリアフリーマップの作製や防災ワークショップに参加していただくことで、障がい者だけでなく高齢者にも暮らしやすい地域づくりに貢献していただく。それが今の私たちのまちづくり活動の大きな方向性になっています。

また、ニュータウン内部だけでなくニュータウンと周辺地域の空間的・社会的分断を超えることも、今後のテーマです。気がつくとも、かつてはライフスタイルの違いから相互に無関心であったニュータウンの住民と旧村地域の住民は、ともに高齢化という共通課題を抱え、しかもそれが深刻化しています。また、防災問題を共有する状況でもあります。宇治川の堤防が崩れたら、周辺の農家や新興住宅地の住民には逃げ場がありません。近くに山もないので、逃げるとしたら団地の高層住宅の三階以上しかないのです。

そうであるなら、地域の団地が防災拠点になっていくしかありません。他方で、高度経済成長期の次のステップとして都市が拡大し、今や近郊農村が新鮮な農作物を直接消費者へ届ける地産地消がブームになっています。ニュータウンや新興住宅地の人たちも新鮮な野菜がほしいということで、すでに向島ニュータウンからすこし離れた久御山に、地元農家の直売所ができています。環境という観点からみても、ニュータウンの住民と旧村の住民は、巨椋池干拓地の水田を守るという共通目的をもって協働することが可能です。巨椋池干拓地に水田があることは、京都全体の環境にも大きな影響を与えているといえます。干拓地の水田がすべて畑になると、京都市の温度は2、3度上がるそうです。今後の向島のまちづくりでは、都市計画によってニュータウンを周辺地区から分断させている外周道路を越えて住民ネットワークを拡大することが期待されるでしょう。

さて、高度経済成長が終わった後、行政は業務の民間委託や政策への住民参加を強調するようになりました。もちろん、まちづくりに行政と住民の連携は欠かせません。しかし、洛西ニュータウンと違って、向島ニュータウンの住民たちのまちづくりに、これまで行政はあまり積極的に関わってきませんでした。そして、ニュータウンの住民たちが、まさに住民主体でつくりあげてきたのは、さまざまな住民や地域団体のネットワークとそれらの連携によるネットワークの重層性でした。行政主体のまちづくりは自治会や学区といった、既存の地縁組織を基盤とした縦割りのハードな構造とならざるをえません。これに対して、向島の住民たちのまちづくりは、行政的な構造を横断する緩やかなネットワークによるソフトのまちづくりだったのです。そこに、住民主導型の新しいまちづくりの方向性が見いだされるのではないかと思います。

高齢者福祉と団地再生～向島ニュータウンの現状とまちづくり～

小林大祐

1 京都市の団地建設

私はもともと建築の人間で、広原先生に大学で教えてもらった生徒です。

京都で最初の団地は、堀川通の建物疎開跡に建てられた堀川住宅（1953年）です。鉄筋コンクリート造3階建ての下駄履き住宅（1階が店舗）で、2年ほど前から改修が始まり、交流スペースや高齢者向けのデイケア施設などを入れた大胆な改修を始めています。次に公団嵯峨住宅が1956年に鉄筋コンクリート造2階建てテラスハウスとして建てられ

ました。そして、伏見エリアにいくつかの団地が建てられました。第一は江戸時代の伏見奉行所のあったところですが、第二は伏見城の跡で、江戸時代を通じて土地利用ができないところでした。第三は山科川を挟んだ南側の土地。この3カ所は明治になって陸軍の施設として利用されました。戦後、進駐軍が入ってきて接収され、接収解除後に団地の建設が始まりました。国道24号線の東側の丘陵地に、国家公務員合同宿舎や法務局の合同宿舎、公団観月橋団地（1962年）。伏見奉行所跡には、京都初の大規模団地である市営桃陵団地（1958年）ができました。山科川の南側には公団桃山住宅（1958年）が建てられました。伏見は戦後早い時期の団地のメッカといえます。そして、1970年代には洛西ニュータウン、そして向島ニュータウンができました。

航空写真を見てもらうとわかりやすいのですが、伏見区には、宇治川の北に、市営桃陵団地、公団観月橋団地、公団桃山住宅、宇治川の南に向島ニュータウンがあります。公団桃山住宅の山科川を挟んだ北側には、明治天皇陵があります。1962年に建設された観月橋団地が50年を経て、空き家が増加して来たところで、公団が無印良品と一緒にモデルケースとして改装工事、リニューアルを行いました。現在、若者に大変人気があって入居待ちの状況です。公団C51型の2Kだったものを1LDKスタイルに変えてカップルで住む。公団だからできる話です。こういうリノベーションが現在、公団住宅では行われています。桃陵団地にはスターハウスが6棟残っています。西側の棟は、バブル期に建て替えが行われ、酒蔵をイメージしたデザインに改装しています。

2 向島ニュータウンの構成

向島ニュータウンは1972年に着工しました。学区構成でみると2, 3, 4街区が二の丸北小学校。1, 5, 6街区が向島南小学校。7, 8, 9, 10, 11街区が藤ノ木小学校です。中学校区は24号線で分かれていて、東と西では校区が違います。市営と公団の分譲と賃貸で見ると、2, 3, 4街区と7街区が分譲。そのうち4と7街区が低層です。6街区が公団賃貸で、1, 5, 8～11街区が市営住宅と、非常にいびつな構成です。当初計画では、1, 5街区が市営住宅で、国道24号線の東側が分譲の予定だったものが、1970年代後半から80年代初頭にかけて不況で売れずに計画変更が行われ、公営住宅に変えられました。その影響で建築の質が悪いです。共用廊下の幅が法規ぎりぎり1.2メートルしかない。廊下の幅が狭いので、玄関ドアを外開きにするとう人にあって事故が起きる。日本なのに、玄関扉が内開きという不思議な状況になっています。こうした設計が現在も影響して、高齢者や車椅子の人が生活できません。廊下の幅が十分ないので、通れないのです。こ

のように、団地の建築をズームアップすると大きな問題が見えてきます。

1街区と小学校と中学校のエリアからみていきましょう。テニスコートは運動施設として公社がもっているものです。1階の集中ポストにはガムテープが貼られているところがありますが、これらは全てが空き家というわけではありません。車椅子に乗っているので手が届かない、だからポストに郵便物を入れるなという人もいるようです。2街区はタワー型の分譲で人気があるようで、中国系の人も住んでいます。3街区は、1棟が165軒のコミュニティです。4街区は低層の分譲で、RCコンクリートの壁構造です。背面を見ると、住戸面積が狭いので後ろに増築しています。違法の建築ですが、鉄筋コンクリートの建物で壁は壊せないはずなのですが、何とかやりくりして住んでいます。2階が張り出した建物もあります。ここが何になっているのか想像がつかないものができています。

5街区は市営住宅で、多くのパラボラアンテナは、中国の衛星放送を受信する方向に向いています(写真2)。各棟に何軒、中国の衛星に向けたパラボラアンテナがあるかを数えました。分譲低層の4, 7街区を除いたニュータウン全体で、1023軒に上ります。街区ごとに比較すると、最も多いのは藤ノ木学区の11街区で31.7%。三軒に一軒くらいが中国の衛星を向いています。全体約6000世帯のうち約1200世帯が中国系の人であろうと、供給公社の人が認めていました。この春に、藤ノ木学区に引っ越した小学校4年生の子どもが、同学年のうち20人が中国系、イタリア人が1人、ペルー人が1人で、日本人の

写真3 中国の衛星に向くアンテナ



出典:『京都発! ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』口絵写真 p.3。

方が少ないと言っていました。また、住民の方が世話をしている花壇があります。京都市は種代をくれませんので皆でお金を出し合っつけてつくっています。

7街区は2×4木造の2戸1の住宅です。最近、切り取り建て替えが行われています。なぜ「一団地認定」（一敷地一建築物の原則の例外として、建築基準法第86条「一団地建築物設計制度」により複数建築物を同一の敷地内にあるものとみなす制度）を受けているのに、こんなことができるのか、全くよくわからない現象が起きています。家付き宅地として分譲されたという話ですが。

8街区は高層で、遠くに伏見城がみえます。8～11街区は市営住宅です。公園で子どもが遊んでいる写真をとったのは10街区なのですが、ニュータウンの他の学区より、藤ノ木学区の方が子どもが多いようです。中央公園の道は、通称「赤道」と呼ばれています。30年たつと公園の樹木が繁って、見晴らしがきかないので治安が悪く、女性が夜歩けません。昼間でも怖いのです。子どもしかいません。藤ノ木学区の公園は、防災公園として整備されており、手押しの井戸があり、災害時用のトイレが設置されています。下水道の上にある鉄の蓋を開けるとトイレができます。

向島ニュータウンは、コミュニティ施設が貧弱で、唯一あるのが向島図書館だけです。あとはどうなっているのでしょうか。市営住宅は、各街区単位で自治会の集会所があります。分譲の方は、当初設計にはなかったようですが、入居者が要求して各棟に1部屋だけ集会所があります。しかし、他の街区の人や他の棟の人は使えません。街区や住棟を超えて皆で寄って何かをする場所が一つもないのです。

中央に商業施設がありますが、酒屋が潰れる、服屋が潰れる。諸々のものを売っていたところが全部潰れて、飲食店も潰れました。シャッター街になっていて、倉庫になっていたり、最近では介護の事務所が入ったりしています。この春に、調剤薬局ができました。その中に中国系の人が必要な食材や雑貨の店があり、中国の衛星放送の受信設備の販売設置も行っています。先に述べたように、中国の衛星放送を受信しているパラボラアンテナがありますが、ものすごい率で中国系の人がいるということです。中国語の教室をボランティアでやってもらっていたのですが、現在は止まっています。中国系の住民は、出身地の違いや世代間の考え方の違いもあって、中国帰国者一世が主体でできていた組織が内部分裂したりしています。中国系のコミュニティも複雑です。

治安が悪かった時代が80～90年代にありましたので、壁にスプレー落書きが残っています。悪さする子どもがいるので、こんなのを集めるとコレクションができる場所です。

人口構成を見ると、ニュータウンは高齢化率が一般のまちの十年先をいっていると言えます。今年の国勢調査までは高齢者が増え、全体では30%を超えて、一番ひどい小学校校区では32~33%までいきました。その後、高齢者が減り始めると推測できます。新しく入ってくる人が少ないのがありますが、市営住宅を出ていける人が少ないので、初期に入居した人がそのままずっと市営住宅に住んでいます。居住歴30年以上の方がかなりの数に上ります。公団の賃貸は住人の移動が多いようです。分譲と市営住宅は高齢化がものすごく進んでおり、足が悪い、障害のある方も増えて来ています。

3 地域交流拠点「京都文教マイタウン向島（通称 MJ）」の活動

2013年1月に「京都文教マイタウン向島（通称 MJ）」を開きました。MJとは「向島」の「M」と「J」、向島ニュータウンのヤンチャな子どもたちが使っている言葉です。「マイタウン MJ」という名前は、11街区で、ヤンチャな子どもが引っ越しの時に描いた「My Town Goodbye!!」という落書きをもとに名付けました。（写真3参照）オープニングの時は市長もきました。市長はもともと教育委員会にいて、この小学校をつくった人です。少子化で小学校の統廃合が問題になっているのですが、市長は、「私は小学校を潰さない。皆さんで考えてください」と、言っていました。

2005年に、向島駅前の葬儀場計画への反対運動から、駅前まちづくり協議会が発足しました。キーパーソンは昭和17年生まれの方です。2008年に私のゼミの学生が関わって、「何かせんとあきません」ということで始まったのが、春の祭典（2010年からは秋の祭典）です。それ以前にもニュータウンの行事はあったんですが、子どもがいなくなって地域で何かをやるのがなくなっていったのです。祭典には、駅前まちづくり協議会と京都文教大学の学生、よさこいサークルの学生、地域の文化活動をやっている女性が参加しています。障害者のサポートをやっている愛隣館の人も参加し、一般募集のフリーマーケットなども賑わいます。無料で食べら

写真4 引っ越した子どもが廊下の壁に残した落書き



出典：『京都発! ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』口絵写真 p.16。

れるものが出ると、大行列ができます。さいわい病院（現向島病院）の方が無料で健康チェックをしたりしました。

MJのイベントを決めるのは、「この指とまれシート」です。誰かが「何かをやりたい」ということを書いて、「この指止まれ」というわけです。それに賛同したみんなが、ワッと乗るというやり方です。MJランチクラブの一番のキーパーソンは、僕らが千手観音と呼んでいる、民生児童委員で学区社協の会長さんです。MJランチクラブでは、民生委員さんと私がお飯をつくって、ひとり暮らしの人に出てきてもらって、ワンコインランチの会といって、皆で一緒にご飯を食べています。年のうち3回は、民生委員さんの負担を減らすために、大学の学食でやっています。もっと多くの回数をやりたいのですが、マンパワー的に限界があります。ランチクラブのとき、近くの幼稚園の園児がお年寄りの肩をたたきにきてくれたりしました。健康チェックをする健康カフェとジョイントしたこともあります。それから、「女性の居場所があるのに、なんで男性のないのや」ということで始まったのが、囲碁将棋の会。「俺らにも使わせろ」と。

また、市営住宅に住んでいる高齢ひとり暮らしの方を文教大学のスクールバスを使って、どこかにいこうという企画を学生といっしょにやっています。日頃あまり出歩かない高齢者をドア to ドアの気軽さで学生がサポートして毎年、三回くらいツアーを行っています。バス代は大学が出すのでいりませんので、必要なお金は「ご飯を各自で食べる」分ぐらい、安い時は1500円ぐらいです。これまで、福井・一乗谷や長浜・彦根、郡上八幡・美濃、道成寺・白浜などへ行きました。美濃では和紙が世界遺産になって博物館の入館料がいらんということで、安くすみしました。福島からの避難家族の母子を対象に神戸ルミナリエ・バスツアーも実施しました。

3月には、「MJひな祭り」があります。昭和10年生まれの住民の方から、「私、これ（戦前の御殿飾り）をもっている」と。市営住宅に住んでおられて、何十年も出してないのでボロボロでした。僕がそのボロボロを直して、飾りました。雛祭りでは、子どもたちにホットケーキをつくって食べさせたりするのですが、お雛さまのお守りするのに、MJランチクラブのおばあちゃんたちが手伝ってくれる。僕が指を立てて「ひな祭り」をやると言ったら、高齢者の人が乗ってくれて。これは、「自分たちも社会の役に立っている」という生きがいを生んでいるようです。

MJでは、このような活動を行っています。

『京都発! ニュータウンの「夢」建てなおします』へのコメント

安岡健一

長野県飯田市の歴史研究所で地域の研究に携わっています。京都はもといた場所なので思い出がありますが、2年間離れて研究会にくると若者の多さに感激しています。今、住んでいる場所で行っている仕事、これまで研究してきたことを思い返しなが、ニュータウンについては横目で見えてきた感じで専門ではないのですが、コメントをさせていただきます。高齢者問題の視点からということで、これまでの研究で関係するところをピックアップするものにしたいと思います。

感想をいいますと、いろんな方法でニュータウンという空間にアプローチしていることよさを思いました。普段、一人で研究していると、単一の方法に基づいてやることになるので、いろんな人が寄り合って共同研究した成果が刺激的でした。特に内容面で実際の問題にかかわろうとしているところ、コンサルの解決策ではなく、「記録」を重視しておられること。今、地域社会で行っている歴史研究は記録をつくるのが結果的に社会をよくするところになると思っていますので、それに共感する思いをもちました。特に「住まいの個人史」を個々にたどっていく実践や「絵はがき」とか、そこを訪れた人、住んでいる人たちが記録をつくりあげていく実践を印象深く読みました。

地域づくりを行政が考えると、まず集団、地域全体のことを考えよう、平均値をみようとする傾向がある。それに対して個人を大事にするアプローチができるという、そういう方法をとったことの意義なのかなと思います。とりわけたくさん問題が出てきていることも指摘しつつも、あちらこちらで住民の主体的な取組が展開されている点も面白く読んだところでした。

研究に大学がかかわることの意義、どんな行政も、まちづくりをやる状況になっていると思いますが、落書きとかも位置付けているのが、自分が今かかわっている行政からは100%、落書きなどは消される以外にないので、そういうものを意味あるものとして位置付けるのは大学がかかわって、「これでいい」ということでないと、なかなか難しいなと。ある種、大学もないと、そういうことをどうやって確保するかが難しいし、羨ましく思って読みました。人口12000の地域で75ヘクタール、それだけの面積に、これだけの人間が住んでいるという、ある種、実験的ということでしょうか。個人的なことをいうと、すごく懐かしい人もいるなという感じで、学部生から院生の時にかかわっていた

障害者介護の活動があり、その中で、ここに住んでいる人とここで会議をして、この人が写っていると、ここがそういう場所だったのかと気づかされました。単に個人的なつながりでいっただけなので、改めて、その時の経験をとらえ直す意味でも面白いなと思って読んでいました。

時期区分として高度経済成長との関係で、この本を読んで思ったのは、60年代後半から70年代以降をどうイメージされるか。戦後直後の移動や移住、還流という問題があり、私は引揚げのことから研究が発端して戦後の流入をやっていたので、それが整理されていくのがニュータウン前史というイメージをもつようになりました。引揚者への対応、京都にも8万人くらい一気に終戦直後に流入してきますが、そういう人たちをどう対応するかは当時の行政にとって大事な課題で、その一つが戦後開拓という形で都市部から、そうでない場所に移住させるということだったということが一つ。もう一つは都市の中に収容施設をつくるということ、引揚者寮としてですね。昭和23年(1948年)の時点で、かなり住宅不足の状態があった。高野川寮は府営だと思いますが、旧陸軍病院を転用する形でつくられた。図面で示しています。病室を引揚者の住居に転用する施設がずっと続いていた。戦後直後にできたことと、そこに満州引揚者が住んで、京都の原谷とか開拓地にいったということは研究していましたが、その施設はその後も続いている1967年、向島ニュータウンの計画した時点で60世帯の引揚者がそこに住んでいました。高野川寮は比較的大きいところで続いていたのですが、1950年以降、引揚者寮を整理する方針が全国的に出されて、京都府は当時、そんなに積極的に整理をやっていなかったのですが、行政文書に記されている過程では財政再建期から一気に本格化していき、1960年、引揚者集団収容施設整理方針が出される。「疎開」という言葉を使っていますが、この方針によって集中管理寮に集中させて計画しますが、結局、うまくいかずに不法占拠化して住民との間に問題が起こるという経過がありました。

数のレベルでニュータウンが生み出したような数万人規模の住民とは違っていますが、戦争が終わり、国が解体して引揚者が一気に帰ってくる状態が、行政的に消し去られていくプロセスと新しいニュータウンができてくるプロセスとが段階的につながっているように読めて、その点が興味深く思いました。高度経済成長期に農村部から都市に人が集まっていくことは50年代後半以降にあります。そこからニュータウンができてくるまでに十数年のタイムラグがある。その時、どうしていたかというのは関心事ではありますが、高度経済成長期を考える時、敗戦への対応に追われていた時期から新しいものをつくりだしていこうという時期だったのかなと読んで思いました。

次に高齢者について。地域に住むようになって切実になって、この人たちを理解しないとやっていけないということで研究するようになったのですが、高齢化率が10年早いというのが本の中にコメントもありました。それは最初、農村に対していわれていたことです。今、研究している飯田市域の高齢化率、全国の高齢化率と比べると1970年くらいまでは農村部が10年先取りして高齢化していました。この中で地域における高齢者の組織化が普遍化して高い組織率、7割とかですが、それくらいの人たちが老人クラブに組織されて全国連合をつくっていく。ところが、そう思ってイメージしていると、もはやニュータウンの方が、その動きを逆転している。2013年、14年には高齢化率が30%を超えるニュータウンの地域も出てくるということで、そうなる和新しくつくられた社会が農村部をはるかに追い越して高齢化していく。農村は農村で10年早いといわれて高齢化に向き合ってきた経験がある。そこでどうやって人が集団化してきたかの一つの参照例になるのではないかなと思うようになりました。

高齢者のことを研究していて、地域におけるリーダーは重要だったというのが結論です。戦後、高度経済成長期に住民の集団化を推し進めていた高齢者は大正デモクラシー期に主体形成されていった人たちで、必ずしもデモクラシー側にいた人ではなく、それを反動的にやろうとしたリーダーが多いのです。在郷軍人会とか、そういう人たちが高度経済成長期に高齢者になって、もう一度自分たちの地域を組織化しようという時、重要な役割を果たしたというのが事例研究の結論です。その時に社会福祉協議会とか公民館を上手に活用して進めている。この本の印象として公民館がないように読めたのですが、公民館等がない中で、よくこれだけやっているなと思いました。実際、公民館主事とかがサポートすることによって培われてきた。文庫活動も公民館主事のサポートが不可欠だと思って見てきましたが、向島は自力でやってきた。この人たちの創造性、努力はもっと強調されてもいいと思います。専門家や行政がサポートするはずのことを住民がやっているところは、農村部の歴史と比較して、特に(私が住んでいる)飯田市は社会教育が盛んなところですが、強く感じたところです。地域設計をどうするかということでは社会教育の機会を提供する重要性を感じました。個人が個人として学んだり、地域づくりに参加する回路がほとんどない中で、40年間経過してきた実践の意味、他の都市がどういう状況はわかりませんが、そういう中でがんばった側面と、本来、権利として保障されているべきものがなかったという二つの面から考えさせられました。翻って、自分が地域社会を研究する時にも参照軸になるものだと思って、このニュータウンの研究書を読みました。

ニュータウンに住んで、なぜ何も施設がないなどという話になるのか。長く住んで「うちの地区にやっと信号ができた」とあるのに衝撃を受けましたが、何もないというのはなぜなのか。よそからきた人にはわからないというところもあるのか。73年のオイルショックの時の買い占めもニュータウンで最初に起きたといわれていますが、区画化された場所だと「切れている」という感覚が出てしまうのかなと思いました。在庫があるのは問い合わせればわかるのに、ある種、集団的な行動が出てしまうというのはニュータウンの中だからこそ出てくる感覚なのかどうか。こういう意識の問題がどういう経験に規定されているのかも別の角度から検討する必要があるように思いました。

リノベーションについても印象的で、農村地域を見ていると木造住宅は地上経済的な成長を組み込んで、どんどん家が大きくなっていったりする要素があります。ところが、ニュータウンが経済成長の反映だといっているわりには経済成長性を組み込んで地域が変わっていくことが、あまり想定されていない。ならば、ニュータウンは一体どういう場所なのか、その時の設計構成はどうだったのかが改めて問われているように思いました。コメントは以上です。

庄司 ありがとうございます。次に今井さんからお願いします。

社会福祉の視点から『京都発！ニュータウンの「夢」を建てなおします ～向島からの挑戦』を拝読して

今井 小の実

これを引き受けるにあたって地域福祉の理論を紹介しないといけないと思ったのですが、私は地域福祉が専門外で、地域福祉の専門の方に問い合わせたら「ニュータウン全体の研究は、まだなされていないようだ」といわれました。地域福祉系の先生が「この本を読みなさい」とすすめられていて、地域福祉の方では出回っているようです。私の役割は社会福祉界における地域福祉の紹介をして本書の位置づけや意義を明らかにすることです。議論のための一つの視点を提供することではないかと考えました。

「社会福祉」の視点でこの本を読みました。問題意識と目的に関しては、次の二つは本書からとってきたものです。まず「短絡的論評への挑戦」。西川先生が第1章21頁にこの研究の意義を書かれていて「ニュータウンの元凶が家族の個人化とか個室の獲得で、そ

れが疎外につながった。しかしそういう空間, ようやく手に入れた個の尊厳を簡単に手放すことはできないから, よくも悪くも『自立と孤独』という現実から出発して個人の生活とニュータウンの建て直しをするしかない」ということで「住民の気持ちをアンケート調査で明らかにする」ことが紹介されていました。もう一つは「ニュータウンの夢」で, 「ニュータウン建設の時には地方行政が中心だったが, 再建の時になってはじめて住民が再建の行為主体にならざるをえない」ということです。そういうことを「なるほどな」と読ませていただきました。「選択肢そのものの発明と創出を始めている」, このへんも社会福祉, 地域福祉の理論と関係してきます。第1章23頁の最後の感銘を受けた箇所ですが, 「社会の先端部分であるニュータウンにおいて住民自身が社会問題を解決しようとする努力のなかに, 絶望とか苦悩を希望に転換する手がかりが見出せるはずと信じている」という研究の姿勢に心を打たれました。社会福祉の側からみると, これは「地域福祉」「コミュニティ」論の発展, 実践と大きくかかわっていて, その問題意識と目的を共有していることがわかりました。

そこで古い辞書ですが, 井岡勉先生の「地域福祉」の箇所をみると, 「地域福祉とは, 望ましいとされる標準的生活からみて好ましくない状態におかれている地域住民もしくは地域社会に対して, その改善及び向上を目的として生活者・住民主体の原則に立脚しながら国・地方自治体および住民組織, 民間団体が協働して以下のことをやっていく」と書かれています。次に「コミュニティワーク」については, 「地域社会の中で生起する住民の共通的, 個別的生活課題を住民主体で, 組織的, 地域協働的に解決していくのを側面的に支援するために」云々とあります。「コミュニティワーク」のものは「イギリスにおける事前組織協会, セツルメント運動, 労働運動を源流として, 後にアメリカで発展した援助技術としてとらえられるようにコミュニティ・オーガナイズーション, イギリスで浸透したコミュニティ・ディベロプメントを包括する」とあります。

「地域福祉」論, 「コミュニティ」論が社会福祉の中で活発化してきた背景と課題を考えます。高度経済成長期の歴史と合致するものですが, まず人口移動が生み出した共同体の変化が大きく, それを背景に1960年代に成立しました。最近でも北海道教育大学の角先生が丁寧にそれをまとめられています。「人口の移動においつかないインフラストラクチャーの整備が劣悪な住環境を生み出してコミュニティへの着目がなされるようになった。コミュニティは政策的に創出されるべきものとして位置づけられたといえる」。こういう背景が一つあります。

現代の課題については, 大槻先生の引用です。1960年代後半は住民運動が盛んであり,

公害対策とか地域住民によって共通の課題が出てきた時期でもあった。これがニュータウンではどうだったか。1960年代に建てられたニュータウンが共同の住民運動を行う土壌があったのかどうか。しかし、大槻先生も「現在は共通の課題が見えにくくなっていて住民運動の視点からは課題が多い」と書かれています。

「コミュニティモデル」研究の歴史を振り返ると、1960年代後半からコミュニティ研究が出てきました。高度経済成長時代を迎えて物質的な生活が豊かになる一方、地域住民に共通する問題が多く発生したり、問題解決するために「町内会とか自治会等の伝統共同体の組織にとらわれない、自発的な住民組織が出てきた。行政、企業にそれを要求していく。地域問題解決という明確な目的志向の組織があった。その中でコミュニティモデルの研究が盛んになってきた」。また、「町内会、自治会等の伝統的共同体に代わる解放的で住民が主体的に参加できる理想的な地域社会のあり方を志向するようになった」なかで、「コミュニティモデル」が盛んになったと整理されていました。

社会福祉の中での「地域福祉」論、「コミュニティ」論はどのような経過をたどってきたか。「地域福祉」界の重鎮、神様と崇められている岡村重夫の問題意識として、「わが国の社会福祉の理論と実践に関するかぎり、地域社会に関する理解は、決して厳密なものではない」とされています。そこで、都市社会学の理論を導入して社会福祉、地域福祉の理論を組み立てていくという問題意識がある。そのために地域社会をきちんと理解しないとイケないということで「奥田モデル」が使われていきます。なぜ地域社会の理解が必要かという点、「たとえば他人の生活困難に対しても無関心な住民の多い地域社会、また住民が近代的な個人意識をもち、はっきりした人権意識をもつけれども、地域的な連帯活動には冷淡な地域社会、さらには多くの住民が明確な個人意識をもつけれども、同時に地域における生活環境や生活条件にも関心をもって協同的解決のために連帯活動に参加するような地域社会等々、地域社会の類型は、社会福祉にとって大きな影響をあたえずにはおかない」。地域社会は行政に働きかけて生活環境を改善していく目的をもっているわけで、「地域診断」といいますが、地域に入って計画を建てる時にはこれが欠かせないと教わりました。私が携わるのは茨木市の福祉計画ですが、そこでも地域診断を使いました。岡村が何をベースにしていたか、複数ありますが、私が井岡先生から聞いたのは奥田道大の「コミュニティ」理論です。横軸が普遍的なものから特殊なものへ、縦軸が主体的、客体的、それについてコミュニティの4類型の特徴を表にしています。「地域共同体モデル」の住民類型は「伝統型の住民層」が担っていて、住民の意識は「地元の協同意識」、住民組織は「旧部落・町内型組織」です。リーダーが大事だと安岡

氏がおっしゃったように、「名望家層のリーダー」が出てくる。次に「伝統的アノミーモデル」は「無関心型住民層」「放任・静観的意識」「行政系列型組織」「役職有力者型リーダー」となる。「個我モデル」が新しい団地などには出てくるのではないか。「権利要求型住民層」「市民型権利意識」が強く、「対抗政圧力団体型組織」「組織活動家型リーダー」となる。この3類型の中から理想としては「コミュニティモデル」にいくというのが当時の理論で、それは「自治型住民層」で、「住民主体社意識」「住民自治型組織」「有限責任型リーダー」が特徴です。先ほど「この指止まれ」の紹介がありましたが、有限で責任をもっていく。

社会福祉関係者による二つの代表的な「コミュニティ」論があります。岡村理論の中で挙げられていますが、一つは「シーボーム委員会報告」。1968年、イギリスで出された新しいコミュニティの中での福祉サービスを提案した時の資料です。シーボーム委員会での報告では「過去の農村に見られた小規模の地域共同体を都市社会に再現するためではなく、『コミュニティ』は社会福祉サービスの受益者であると同時に提供者でもあるという実践的根拠、ならびに社会福祉サービスが個人、家族、集団のもつ社会関係を取り扱うためにはコミュニティへの志向が必要不可欠だからである」とあります。この委員会報告は新たな「コミュニティ」の創出、新たな福祉サービスをつくりだす理論的な根拠、枠組みをつくっています。次に「コミュニティ」という用語は、一般的には地理的場所と共通の同一性をもつ人々の集団の双方を意味してきた。つまり一定の場所に居住して、互いに同一性の感情をもった人間集団であった。この本にも紹介がありますが、コモンからシェアへと特徴づけられる人間集団です。しかし、このような定義は困難であるという問題意識が、すでに1968年においてありました。

「コミュニティ」とは、「成員のあいだに相互的援助が保障され、かつそれ（相互的社会関係）を経験する人々に幸福感あたえるような相互的社会関係のネットワークが存在していることを意味する」。本書でもネットワークの重要性が指摘されていますが、そういうことがいわれています。

これに対して、岡村はどう評価しているか。「全過程への住民参加を強調している」話とか、岡村の総括のなかで「日本と違うのは、日本の場合、普遍的な人権意識が強調されて、単なる同一性の感情や、相互的援助だけでは地域の集団のエゴになりかねないという点からいえば、この普遍化的で価値意識の存在は、コミュニティの存在にとって重要な契機である」とされている。人権意識が大事だといっている。ここが社会福祉からみた見方だと思います。

もう一つ、日本でも中央社会福祉審議会が昭和46年(1971年)に「コミュニティ形成と社会福祉」(答申)を出しています。その中で高度経済成長期の問題点として人口移動の問題を指摘しています。「生活の自然的, 社会的環境の悪化をもたらしている」との問題意識で、「これにかかわる新たな地域社会が形成されないまま, 住民の多くは孤独で不安な生活を余儀なくされている」と核家族の問題点を指摘しています。また, 「所得水準の向上や余暇時間の増加に伴い, 余暇についての考え方も大きく変化している」ことも指摘しています。コミュニティについてベッドタウン的な位置づけではありますが, それだけではないことを考えていく必要があるのではないのでしょうか。「自ら主体性を確立し, 生きがいを求める時間となりつつあり, 余暇活動についてのニーズも高まっている」, 「コミュニティの形成なくして国民の生活福祉の向上を期することはできないものである」。これは審議会答申の最初に書いてあり, そういう問題意識の答申も出ています。

岡村の総括では, 「コミュニティ」は地域住民の諸要求を充足する場として, 「社会資源の総合的開発整備」が第一に重視され, それが「コミュニティ形成の土台」になるというものです。したがって, コミュニティ形成の運動モデルとしても, 個人の利害から社会的利害への変化を強調しています。「コミュニティ形成の方向」として第2に, 「住民参加」を重視すべきことを繰り返しています。この答申では, 地域生活環境とか社会資源の体系としての「コミュニティ」を重視し, 第2の契機として「住民参加」をあげています。そして, 社会資源と地域生活環境と住民参加が不可分なものとして把握するのでなければ, 「コミュニティ」はたちまち旧来の地域共同体や無関心型地域社会の一時的住民運動と同じものになるだろうと1974年に岡村は言っています。

岡村の弟子の右田紀久恵は, その著書『自治型地域福祉論の理論』の中で, 「第1に, (地域福祉が) 地方自治との不可分性を有する」ことを指摘しています。何とか地域の状況をよくしていくことで, どうしても行政との関係が強まるが, その中でも地域福祉の関係性がある。「第2に, 自治概念を不問にしてはだめだ」とも言っています。「第3の問題意識は, 1990年6月の福祉関係八法の改正で, 基礎自治体への権限および事務移譲」がされて高齢社会への対応が迫られたことがあり, 第4に, 「自治とは何か」ということを社会福祉論から問うていくことが大事だと言っています。第5は, そうした枠組みで社会福祉の理論を展開しています。

本書に対するコメントを述べます。「地域福祉」の展開を踏まえてみていきますと, 社会福祉特有の性格があります。つまり行政との連携, 協同が不可欠なゆえに, 行政に近づきすぎて巻き込まれ, 場合によって行政の施策の単なる代弁者的な役割を担いかねな

い危険性がある。また社会福祉の伝統的な対象観がある。そのために地域の抱える課題の分析から入ってしまい、今回、向島をみただけでしんどい地域だなどと思う。ところがそういう評価が全くなされないまま、本書が研究されていて、却ってそれが新鮮でいいなと思いました。そうでないと、前提としての「地域診断」が負の側面に偏った見方になってしまう。本書での実践、枠組みを見ていくと、行政から距離をとった、かつ対象がニュータウンというまち全体であること、地域福祉でも、まだできていないところがやっていることなどが研究の特徴ではないでしょうか。さまざまな領域の研究者の集まりから成り立っている学際的な共同研究であるがゆえの自由な発想に感銘を受けました。さらに歴史的な考察があることで、この取組の未来図も描きやすくなっていて社会福祉の研究では不十分になりがちな歴史研究の重要性も改めて確認させていただきました。

蛇足として一言。所得階層の格差の問題が出てきました。実は現代版スラムの形成への不安があるのではないかと、第2章、終章に繰り返し格差の問題、均一性の問題が書かれています。地域への大学の貢献も書かれていました。思い起こすと京都文教大学で社会福祉原論の非常勤講師を長年務めさせていただきことがあるなと思いだしました。すばらしい学生たちでした。

「コミュニティワーク」の源流はイギリスにおける慈善組織協会、セトルメント運動、労働運動です。セトルメントは知識階層が都市スラムの地区に住み、下層労働者に対して人格的な接触をして生活改善と自立向上、地域的統合を促すとともに、地域環境や制度の改善を働きかける社会改良運動の一形態で、19世紀末の運動です。イギリスの代表的なセトルメントはトインビーホール、切り裂きジャックで有名なロンドンのイーストエンドに設立されています。1884年に設立され、世界のセトルメント運動の先駆けとなったもので、アメリカのハル・ハウスもトインビーホールをモデルにしていますが、それは女性たちの社会進出の場になりました。トインビーホールはオックスフォード大学とかケンブリッジ大学の教員や大学生、卒業生がキャリアアップするところでもありました、男性主導で。そして向島における京都文教大学の教員、学生の実践は現代の新たな社会問題に取り組む現代版セトルメントではないかと思った次第です。

庄司 なかなか力の入ったコメントで後の議論にどうつなげていけばいいか、ちょっと考えます。ここで少し休憩を入れて、討論に移りたいと思います。

ディスカッション

西川 祐子, 杉本 星子, 小林 大佑
今井小の実, 松井久見子 (昭和堂), 広原盛明, 杉本 弘幸, 原山 浩介
庄司 俊作 (司会)

庄司 お二人のコメントを受けて報告者から何かございますか。皆さんもご感想をおもちだと思いますので、ご自由にいつてくださったらと思います。よろしく願います。

西川 この本の編集に苦勞された昭和堂の松井久美子さんが会場におられます。もともとの企画は10年ほど前に出ていて、松井さんは長いあいだ研究会にもつづけて出席され、わたしたちの共同研究会をずっとフォローしてくださった編集者なので、一言お願いしてください。

松井 京都では、向島ニュータウンのことは小学校の時に習うんですね。巨椋池干拓のことです。それで、地元意識をもっています。先生方のお話にもありましたように、学生たちが先に動いたというのも感銘を受けました。それに呼応する形で先生方が研究を進められる。もう一つの京都の顔として、形にすることができてよかった。先ほどのコメントで、この本の中に「行政」という言葉が出てこないということができました。都市問題、福祉が絡むのに、「行政」の言葉が出てこない本も珍しい。行政の方に感想を聞いてみたいなと思います。

庄司 あとはご自由にどうぞ。

杉本 (弘) 一つは、この本ができるまで10年かかったことに関連します。高島平の実践とかもあると思いますが、ニュータウンはどこも同じ問題を抱えていて、大学とニュータウンの連携とかがある。三重県の名張でも工学館大学ですか、ありますね。京都文教大学のプロジェクトは早い時期からやっているのが売り物だと思うんです。後発ではニュータウンと大学の連携事業がありますが、その中で向島研究の独自性は何か。もう一つは、今井さんのコメントに関連するんですが、「行政とか福祉が出てこない」というか、行政と福祉は前提であるんだけど、それが全然対応できていない。行政や福祉、社会福祉協議会とかあるけど、社会問題的に押さえられていないのが現状ではないか。機動性がなくて対応できていない面をセトルメントとっていいのかどうか分かりませんが、そういうところである程度対応できているところがある。それでも住

民組織とか事業者が分裂して消えてなくなったという話もこの本には書かれていて、大学が入ったことによってフラストレーションもあったと思うんです。既存の福祉団体とか住民組織とかが全くなく、ソフトランディングできたのか、がちゃがちゃしながらやっているようだが、そのイメージがよく分からない。つまり、向島団地の事業の中で大学のプロジェクトの位置が地域住民にどう見られているのかや、既存の団体との関係とかが全体的にわからないのでお聞きしたい。

庄司 いろいろ質問が出されましたが、まとめてお答えいただけますか。

小林 大学がニュータウンに入っていく話でいうと、京都文教大学は決して早くないんです。むしろかなり遅い方です。10年以上前から明石では明石高専が入っていたりします。学生に「ここに住んで卒論書いてくれたら家賃タダにしてやる」とか、いろんなところでやられています。軋轢はなかったかということですが、フリクションはありそうだったんですが、うまく抜け道があった。学生が間に入るというのが大きいです。「先生、あれなに？」ということから始まって、「それなら、まちづくり憲章があるからお前、飛び込んでこい」といってやった。わりとヤンチャな子やったんで、「なんかせなあきませんで、おっさん」というところからスタートしました。それで、キーパーソンの向島駅前まちづくり協議会の会長さんはもともと労働組合の方なので、「そら、せなあかな」ということになった。今回、キーパーソンには結構、労働組合の専従だった人がいるんですよ。そのへんの人たちが人間関係の軋轢が理解できているので、うまく問題が表に出ないようにして流していつているんです。

杉本(弘) 調整能力の高い人がいるということですか。

杉本 早くからニュータウンには、大学の建築系の人たちが入っています。京都文教大学では、文化人類学とか臨床心理学の教員が出ていきました。その意味で新しいというか、違うアプローチになっているのが独自性といえます。今では、他の地域でもそういう文系の人たちも入っていますが、その意味では早かったかなと思います。ニュータウンに大学の教員が入る時も、普通は学識経験者としてニュータウンのまちづくりを主導する形で入っていくんですけど、我々は町の人と遊ぶ形というか、行政との関係でお願いされて入っていく形ではなかったのです。幸か不幸か、伏見区が行政として、向島ニュータウンに本格的に取り組もうとしていなかったものからです。

小林 伏見区は、ニュータウンに全く興味がなかった。むしろ宇治市に押しつけたがった。

杉本 ようやく最近になって、行政や福祉団体の動きが出てきています。本にも書いて

あるように、「向島安心安全ネットワーク会議」というのが福祉系の関係者の情報交換の場なのですが、そこにでてくる団体とMJの活動とかが、ときどきいっしょになったりしています。といっても、一つのまとまりをつくろうではなく、いっしょに楽しいことをしようよというスタンスです。それがないと、いざという時につながれない。福祉の目的のためだけに人が集まると、息が詰まっちゃう。だから遊ぶとか、なにか楽しいことをやることから入っていくわけです。いろんなことをやっているうちに、その結果として福祉のつながりができたりする。たとえば、ある学区には社会福祉協議会がなかったのですけれど、それを「立ち上げようか」という話になったりしました。

小林 社会福祉協議会は、分譲の学区の方には立ち上がっていたけれど、市営住宅の学区の方にはなかった。押されるような形で、この間できたんです。

杉本 いろいろやっていくうちに、「包括支援の問題も、いっしょにやっていかないとね」とか、ぐさぐさ動いていたら、そこに何かののってくるという感じです。行政や福祉との関係でいえば、上からこれを「やってください」ではないところが、一つの特徴かなと思います。

西川 「セトルメント」といわれてちょっとびっくりしたんですが、私たちが学部学生の時は大学生が西陣のセトルメントに入ったり、被差別部落に入ったりしていましたけど、それとはやや違いますよね。というのは、今までのニュータウン論は「こうすれば幸せになります」という指導型で、私たちははじめから「後ろについていきますので」というやり方です。研究者が記録するのが何の役に立つやると、住宅の個人史収集をやっていて何度もたちどまって考えました。でも、けっきょく面白くてやってきました。聴く方も話すほうも面白がってわいわいと続けました。初期のニュータウン入居者は今までの生活を一種、切断して、電化生活とか核家族とかの新しい生活に入ったわけです。「ライフストーリーを聞かせてください」というと皆さん、「別に云うことないよ」とにべもない反応です。でも「引っ越し歴を聞かせてください」というと、いきいきと止められない勢いでしゃべりまくらはる。それが面白くて10年近くやりました。そこが新設大学の共同研究だったのではないかなと思います。「来て、何をしてくれるのん?」「何も得なこと、してあげられへんけど、それでも後ろからついてきます」とぼちぼちと記録してゆきました。かつての近代社会の権威ある大学の教員と大衆社会のふつうの大学の教員の、そこが違ったのではないかという気がします。10年やっていて「これ何の役にたつのかな?」と自身がまだ迷うのだけれど、でも記録があまりにたまってきたので中間報告はしておかなければ、ということです。まだまだ

続きがあるはずです。

今井 少し補足させてください。「セツルメント」といったのは、あくまでも「現代版」ということでいいました。公団のある一定の所得層が集まっている状況とか、定義の仕方がよくないので、新しい言葉ができたらいいと思いますが、「現代版の下層のところが集まった」という意味です。セツルメントという言い方は、イメージ的に確かに大学でも教員が指導する形でしたし、それとは全く違うと思いました。用語の使い方がちょっと問題だったかなと思います。

西川 もう一つ、理想があってユートピアに向かうのとは違うかもしれませんね。私たちの世代はそれに向かって何回か挫折して幻滅してきた。理想があって描く共同体が信じられないという経験の後で「追い詰められて初めて出てくる知恵。これをしがないと生きていけない、そこを信用する」というのは実は新設大学がおかれている状況も同じだからなんです。追い詰められて、そこでどうやって今をしのいで次に行くかというところにおります。そこから出てくるものと、理想像を描いてその設計に従って、というのとは、どこか違うんじゃないかなという思いがあります。「追い詰められた人間は、これだけ知恵が出るんや」というところに感動、共感するということかなと思います。

小林 それはここの教員だけではなく、向島ニュータウンの住民自体が追い詰められている状態なんです。行政が何もしてくれないから。労働組合運動をやってきた方の中には要求型の人もあるんです。行政に圧力をかけるタイプの方もいますけど、内部では、あまり信用されていない。「またいうてはるわ」という話です。実際にやった者たちで、オモロクやろうというところから入っていつている。助成金ではないので、公平性はいらぬんですよ。そこがスタートとしては大きいかなと思います。「あの人が呼ばれていて、私、なんで呼ばれてへんの?」「やってへんからやで」といえるんです。

杉本(弘) 「やりたいなら、やりたいといえよ」という感じですか。

小林 そうそう、「やりたかったら、皆がウンといたら応援するし」という世界なんです。セツルメントではなく、イギリスのローカル・アメニティ・ソサエティのような、わりとゆるやかなものです。「あれ、汚いよね、何とかしようよ」というノリですわ。前を歩いている子どもを見て、「夏休みに入って痩せてきたんちゃう。食わしてあげないかな」という話なんです。それがスタートなので、根本を変えようと誰も思っていないし、変えられない。

杉本(弘) 無理でしょう、よくはならない。僕は東九条に住んで13年になります。も

ともと広島出身ですので大学院の時に京都駅の近いところに住んでいて、東九条に近いので飯食いにいくと、じいさん、ばあさんがいて何かやっているんですが、結局よくなる、よくなるわけない。ある程度、止めているだけです。福祉資源の動員をしたって止まっているだけです。あと、おじいちゃん、おばあちゃんは死んじゃいますしね。ボランティア団体とかいっぱいあって、何をやっているかという、イベントをやって人間関係をつないでいる方が人が集まる。福祉系でバリバリやっているところは、あまり人気ないんです、ほんとに。ちゃんとした福祉施設が人気ないというか、あまり人がこない。これは事実です。

今井 めちゃくちゃショックなんですけど。

杉本(弘) それは事実です。受益者って、やる人とやれる人と二分法になっているところ以外、見ないです。

今井 私をもってきたのは1960、70年代の例で、今は違います、絆も社会資源として途絶えています。

杉本(弘) NPO型に移っているのはわかります。福祉法人としてやるとしたら、市の認可がおりないから仕事としてやる。そうなるのはわかるんですけど、向島ではどうなっているか。

小林 大学としての位置づけはサテライトですが、ただし大学から紐がついていない。

杉本(弘) ほう、つけなかった。

小林 あえて「お金いりません、人もいりません」ということです。大学から金を出してもらっても、その助成金がなくなったら、自分にとってたまらん話なので、人がいなくても回るようにするからスタートしている。このままNPOにいける状態なんです。

杉本(弘) それは多分正しくて、例えばマダンという在日朝鮮人向けのもので補助金をもらっているところはなくなっていく。行政から資源をもらうところは、資金がなくなると終わっちゃうんです。金を集めるシステムをつくってなかった。店舗を出したらいくら金をとるとか、給付金を受け取るシステムをつくっているところは続く。東九条マダンは今ももらってないので実行委員会形式でやっている。マダンでも7割くらいなくなったけど、補助金をもらっているところはなくなった。祭研究でもいわれていますが、補助金をとっているところの方が続かないという、悲しい現実があったりする。

小林 補助金は使って、なくなったら、また考えてやるというふうな。

杉本(弘) 依存するシステムじゃだめなんです。それをプラス α で使えるところはいいいんだけど、金集めも人集めも自分たちでシステムをつくって、補助金とかをやらないところじゃないと潰れている。

小林 向島のシステムというのは、大阪の平野とか福知山でやっているものをそのまま持ち込んできている。もともと金がなくてもできるシステムを立ち上げている。それと実行委員会形式でやっている。

杉本 大学が入ることで、しっかりとお金が出ているところもあります。住民がその話を聞いてきて「大学でお金を出して人も雇ってやってるんだって」ていうから、「うん、それやってもいいけど、大学がなくなったらお金もなくなるからね」というと、皆、納得するんですね。「お金なくてもいいや」みたいな感じがある。

小林 京都文教大学は4つサテライトをもっていた時期があって、そのうちの一個はなくなっています。

杉本(弘) 切られたら終わりですね。

庄司 広原先生、先生のコミュニティ論から何か、または西川報告の感想とかありましたらどうぞ。

広原 別の合評会で率直にいったら、その人から「人格攻撃だ」といわれたことがあります。未熟な著者がいらっしゃらないということで率直なところを言わせていただきます。大学の活動、実践論としては面白い。いろんなアプローチがとられている。ただ本としてのまとまりはどうか。ばらばらの印象を受けました。空間論がないからだと思うんですね。西川先生は「社会史」ということをいわれて社会はあるんですよ。ニュータウンの定義のところこういう空間の規定をされていますが、これは一般的な規定でですね。イギリスのニュータウンと日本のニュータウンの違いはこの本から出てこない。イギリスのニュータウンはロンドンという大都市の混雑と過密をコントロールするためにオーバースpill人口の受け皿としてニュータウンをつくったんですよ。そこに出ていくのは中産階級で、ガーデンシティの系譜を継ぐ。日本のニュータウンは大都市集中を前提とした受け皿です。大阪は過大である、東京は過大である、だから外に出して東京の過大化を止めるためのニュータウンではなく、「東京圏にいらっしゃい、大阪圏にいらっしゃい、名古屋にいらっしゃい。その受け皿がないからつくりましょう」ということだった。大阪は最初、受け皿もなかった。それが木賃アパートです。門真、守口、寝屋川で「木賃三都市」といった。それを地元でいうと嫌がられるので、いわないですけど、現実には木賃アパートに住んだんですね。松下は社宅

を一切つくらなかつた。そこと契約したんです。徹底的に安価な労働政策です。それが都市の過密を呼んだので、そこで一定の階層をクリーニングして公団住宅とか市営住宅団地をつくる。しかし、それは大阪の過大化を止めるわけではない。日本のニュータウンは、そういう歴史的な背景をもっている。それに規定された人たちが、ニュータウンにきている。そういう文脈が、この本の中にはない。

二つ目は、日本のニュータウンは住宅政策とリンクしていて、日本住宅政策は階層政策だということ。分譲、社宅、公団、公社、賃貸とか、階層が始めから違うんですね。僕たちが千里ニュータウンをやった時はミックス・ディベロプメントといって混合政策、混合しないとだめだということだった。分譲住宅街区をつくって、公団住宅街区をやって小学校区はこんなになりますからではなく、一つの街区の中に公団も入れる、市営も入れる、ミックスする。緩和ですよ、根絶ではない。ただ、それが比較的問題が生じなかつたのは、成長の時代で、経済格差も中の下から中の中になってという時代だったからです。それで格差が緩和されていって比較的うまく機能した。ところが、経済成長が止まると階層が出てきますよね。それがニュータウン差にも出てくるわけで、洛西ニュータウンと向島ニュータウンで明らかな格差が、最初からあるんです。洛西ニュータウンは上田篤という研究者がつくったんだけど、向島は民間コンサルタントに丸投げしたんですよ。最初から計画のレベルが違う。高層アパートであれだけ集約すると、どういうことになるか、その段階ではっきりわかっているわけです。東ドイツの高層住宅団地の荒廃ぶりとか、当然、起こることはわかっているわけだけど、それを承知で京都市はつくったわけですよ。全体の空間、ニュータウン論の空間論がちゃんと描かれた上で、向島はどういうところに位置するか、したがってこういう問題が出てきて今後の対応はどうするか。それは京都文教大学がやっている実践にもあるんですけどね、焼け石に水です。ではどうするか。東ドイツなんか壊したんですよ。高層住宅は全部ちょん切ったんですよ。10階建てを4階建てにするとか、並んでいるのを間引いて密度を緩和するとか、コミュニティ施設をつくるとか。というのをあわせて考えていかないと、このままでは荒廃化のスピードは、はるかに高い。そういうことを踏まえた上でやってもらうなら全然、異議はない。

西川 わたしはある時、建築家がエンドユーザーという言葉を使われるのを聴いてショックを受けました。そうか、団地、ニュータウン設計をする設計者のユーザーは県知事なんだと初めてわかったからです。エンドユーザーである住民は計画時に呼ばれるわけではなく、再開発の時に初めて計画に参加できるのかもしれませんが。はじめは

入居時に選択肢を提示されるだけです。ニュータウン論は、広原先生がいわれたように「こうあるべきだ」ということで書かれてきたと思うんです。その中で高度成長期が終わればニュータウンが荒廃するのはわかっているんだけど、それでもここから出ていくわけにいかない。ここで生きざるをえないものが、どうするかという方の問題なんですね。

広原 それは問題解決のアプローチの違いですからね。それは西川先生のやり方と…。

西川 私のやり方というよりも、今までのニュータウン論では解けない、荒廃するしか仕方がない、そのとおりでと思うんです。わたしたちはその現実をリアルに見ていないわけではなく、だけど、そこにしか生きられない、「出ていけ」といわれても、いく場所があるわけではなく、というところから一緒に考え始めました。

広原 それは、ある意味で居直りの論理というのかな。

西川 居直りかな？

広原 僕はそう思いますね。

西川 未来像を描く役割もあるし、しなければならないのは、よくわかる。しかし「私たちはここで生きていかざるをえない」という現実を見ざるをえないです。

広原 その現実是否定しないんだけど、空間と社会の関係にメスが入っているかということなんですね。

杉本 以前、ニュータウンのトポグラフィーという論文で、洛西と向島の対比を書きました。先生がおっしゃられたことは嫌でも目に入ります。向島ニュータウンの特徴のところで「立地」をあげたのは、そこなんです。そういうことを大学の紀要に書くことはできたんです。ただ、本にする時に書く必要があるかということです。この本が研究書であるならば、しっかり書かないといけませんけれど。

広原 そうです、その問題です。「どういう本ですか？」ということです。

杉本 この本は、私たちがこれから住民の方たちと活動をしていくための、住民への応援歌でもあります。住民がここを住処として思い定めたから、住民が主役。そして、私たちは脇役からおりない覚悟だということを、住民に、ある意味で形に見せることが、今の時期に必要なかということで編集したものなんです。突き詰めると、先生がおっしゃるような問題はもっと考えないといけない。大きな水害があったら、ニュータウンの高層住宅が周辺の人たちの逃げ場になっていくことを考えれば、空間をもう一回り大きく採り上げて考えないといけないし、実際、それはこれからの実践にもかかわってくるのかなと考えています。

広原 実践論としては、僕はそのとおりだと思うしね、現実に向島はあるわけですから。それから離れて実践をやるわけにいかない。その範囲であれば、これはまさしくアクティブな積極的な本なんですけども、西川先生が「社会史」という一般論を提起されるのであれば、「空間と社会」の関係をきちんと理論的に位置づけないといけない、単なる実践論では物足りない。西川先生の本を書かれたものをずっと読んできたから物足りないんです、今回は。

西川 本の中では「社会史」という言葉は使ってないです。

広原 レジュメに書いてある。そういう問題意識で書かれている。

西川 ここで話す今日の私の問題意識は「社会史」です。なぜかという、この研究会が「高度経済成長の社会史」だからです。社会史研究からヒントをいただきたいから、ここで出すのであって、ここの研究会とかみあわないところがあれば、かみあわせたいです。考えるヒントをいただきたいから。

広原 そうです。そういう視点から西川理論を求めているのです。

西川 私は都市計画の方といっしょにやっていて、都市計画の側に一度も回ったことはない。常に住む立場から考えてきました。個人住宅のことを考えてきた時も建築家の立場に回ったことはないです。私には住む立場しかありません。

広原 それはできないんです。

西川 私は住む当事者の側からしかいえない。私のやってきたことはそういうことかなと思います。

小林 広原先生のいわれることはよくわかるんですよ、僕も建築の人間なので。あと10年後、この日本はどうなるのかというリアルな話が出てくる。今、まちづくりを担っているおっちゃんたち、10年後は死んじゃいますからね。おばあちゃんだけが残る。格差はものすごく縮まっているんですよ。みな、現役を退いていますから、年金生活です。かつて分譲の人たちが通っていた向島の学習院と呼ばれた学校が統合される。そういう話になってきますから、どうするかは多分、住宅政策の話なんですね。市営住宅が老朽化した時にどう建て替えるか。京都市はバンザイしていますから、人口が減っていくのを待っているのか。分譲で売った責任をどうするのか。建て替えができない。売り出し価格700万で、買い取り600万ですから。そんなところで建て替えの必要は誰も出せない。民間事業者も「いりません」となって公団も拒否している。それをどうするか、京都市が腹をくくるしかない。

広原 もっというなら、ニュータウンは高度成長期の「歴史限定的産物」ではなかった

か。それは「特殊解」だった。「一般解」は、ニュータウンが一般市街地化した方向を見据えた研究が必要ではないかと思っている。

西川 そうですね。ニュータウンはニュータウンとして再建するのがいいのか、それとも囲まれた現状から外の地域へとしだいに滲みだしする方がいいのかという議論をくりかえしてきました。ただ、あの設計は外周路で囲まれていて外へなかなか出られないんですよ。だからそれこそ、どっちも追い詰められ、ニュータウンも周りの地域も追い詰められ始めた今になってようやく交流の兆しが芽生えています。それにニュータウンは特殊「高度経済成長の副産物」というのはよくわかるんですが、京都市内でも状況は同じではないか。私は今は左京区の住民ですけど、ニュータウンとほぼ同じ住民の高齢化状況のなかにあります。市内の路地奥も追い詰められております。

小林 行政としては取捨選択していると思います。今回、伏見区の団地を「再生」とはいいませんが、検討するための部署をおいたという話を聞いています。小学校が出ていくと跡地ができる、いずれ古くなったところを潰していったら跡地ができる。それをどう活用するかという話です。それを検討する部署が必要だから置いたのか、いい方に考えれば団地を再生するために置いたという話なのかそのへんはわからない、疑っていますけど。

杉本(弘) 自然減を待っているという。

小林 今、不足する高齢者の受入れ施設をつくるのかもしれない。大分増えてきていますから、そういう施設も。

広原 僕は部落の再開発とか改良住宅もずっとやってきた。部落の改良住宅の真ん中にコミュニティセンターをおいてね、周りの人と隔絶した環境をつくるというのは絶対だめなんですね。部落解放の理念にも、はじめから反している。地域に馴染む改良住宅とか部落計画はどうするかという問題もね、部落差別では出てきたんだけど、ニュータウンの団地も同じような問題を京都市は抱えていると思うんですよ。団地を前提にして、ニュータウンを前提にして「どうするの?」という考え方だけでは対処できない。これからどんどん人口が減っていく。空き家をどうします? 入居させるんですか? 人口の減少時代、成熟社会の時代は高度経済成長期につくられた、あの空間をどうやって一般的な都市の形に戻していくのかという戦略をもたないとね、問題は解決できない。施設一つにしても、学校一つにしても、どこにやるか、相変わらずニュータウンの真ん中に置くんですか? もっと隣接地で交流できる場所にもっていくんですか? 新しいショッピングセンターをどこに置くのか、そういう周辺との関係も

考えないといけない。そういう点からいくと物足りなかった。

西川 そういう展開ができるのであれば、都市計画からも行政からもどんどん具体案を出してほしいですね、やっぱり。

広原 言うだけです。

小林 向島ニュータウンにかかわり始める前、15年くらい前に建築の方でニュータウンの商業施設の研究があって、全国30いくつかのニュータウンを扱いましたが、向島は外れているんです。あまりにも状況が他と違う。全く例外的なニュータウンなんです。これだけ市営住宅が多いのに、中心施設がない。ニュータウンの中にはないですもの。駅は最初から計画がなくて、駅前概念がもともとない街です。そんなのはほとんど考えられない。向島を入れるとおかしな論理になるから、外そうという研究でした。

杉本(弘) ニュータウン設計の中でも本当に投げっぱなし。

小林 投げっぱなし、売りっぱなし。

杉本(弘) 必要だからつくって、みたいな。

小林 途中でやめる勇気もなかった。

杉本(弘) どんどん増やしていった。

杉本 ニュータウンの真ん中に国道24号線があって、そのすぐ脇に向島ニュータウンセンター商店街があるんですが、店舗はニュータウン側を向いているので、国道の方からは商店街がまったく見えない。車は、国道から商店街のなかには入れない。国道だから車はたくさん通っているのです。本当ならそこでイベントとかやれば人が入って商店が潤うはずなのに、構造的にできないのです。

杉本(弘) あそこは改良住宅なんですね。不良住宅地区の改良事業みたいなものだ。

小林 そんな発想でしょうね。

庄司 最後に、他に何かあれば。

原山 ざっくりした感想ですが、この本から考えたのは、私たちの前には多様なニュータウンがあり、定義自体が大変難しいということでした。一方で、高度経済成長のイメージを背負ったニュータウンがある。私が今住んでいるところの近くでいえば、1979年に入居が始まった千葉ニュータウンもまた、時代は少し後になるけれど、そうしたイメージの延長上に位置しているように思います。しかし、ニュータウンとは、そうしたものばかりではない。そのことを踏まえながら、戦後、あるいは高度経済成長期以降を考えたとき、それは、実は「その場所に住むことの自明性を失っていく時代」というふうに見ることもできるのではないかと思いました。そうしたなかで、それぞれ

の場所で、ものごとをどうやって差配するのか、その方法を、みんなあまりよく知らないというような事態が起こっているといえます。ニュータウンを考える時にどう、うまく都市計画を作っていくのかという視点もあるのですが、他方で、問題に直面した時に、済んでいる者がどれだけ、対処するためのカードを持っているのかということが問われるという部分が非常に重要だろうと思います。ニュータウンが一般社会より10年早く問題を露呈させているのだとすれば、今後10年、20年を見通したときに、そうした部分がより重要性を帯びてくるのかも知れません。ニュータウンというのは、高度成長を華々しく象徴するものとして描かれることが多分にあります。しかし、もう少し踏み込んで考えれば、人と地域というよりももっとミクロな社会の間の関係性を組み替えられてきた象徴として、ニュータウン論というのは、戦後史において大きな意味を持つのかも知れません。とりあえずは、自明性の喪失という程度の言い分しか思いつかないのですが、しかしこの視点は、戦後史を考える上で、非常に重要な論点であると思います。この本は、そうした意味での問題提起なのではなかろうかと受け止めました。

西川 今のお話を聞いていて、もう一つ思ったのは、ニュータウンより前に「高度経済成長とは何か」ということを考えた時、ニュータウンの立地条件のなかにそのヒントのひとつがあるような気がします。戦争と高度経済成長は別のテーマのように見えますが、関連するのではないかと。小林さんが京都の団地について最初に出された事例が思い出されます。堀川団地は戦争末期の家屋疎開跡地に建設されました。桃山の団地群も日本陸軍第16師団の跡地の一部です。ニュータウンに近接する京都文教大学の敷地内に高射砲台地があります。宇治の火薬製造所に近かったからです。全国のニュータウンはしばしば軍事施設の跡地に建設されます。戦争がもたらした荒廃の跡地です。そして、戦争が生活にくいこんだ爪痕を残したと同じように、高度経済成長もまた荒廃を残すものではないかと。ニュータウンの問題をどう解決するかだけではなく、庄司先生が「高度経済成長の社会史」といわれる時、私たちの生活全部をひっくり返して問題にしているんだなという気がして私は高度成長の研究会に参加しました。「社会史」という概念も、日本社会では流行でしかなく、今、なかなか本気で使わないところがあると思うんです。生活史とか生活誌というと、「女性史研究の方は女性だから生活史をおやりにになったらいいですね」とまたまたゲッターに入れられてしまうんですけど、そこをゲッターにはいけない、日々の生活こそが政治、経済、思想闘争の舞台ではないかと、生活を考えると政治、経済、思想を考えることだと私は考え

ています。そういう意味で「社会史」という言葉を、もうすんだ流行というのではなく、これからもまだ使いたいなという気が私自身はしています。

庄司 いろいろとまだご意見があると思いますが。読んでいて大変面白かったのですが、こういう問題は政策の役割とか行政の役割もある。そのへんが抜け落ちているので、「情緒的」というと申し訳ないですが、課題が明確にならないという話になるのではないか。「変革」とかいうと古いタイプになりますが、全体的にとらえることが「社会史」の意味だと思いますので、国とか行政の顔が見えないのがちょっと物足りないと思いました。それは今後の研究で深められていくということですので期待しています。それではこのあたりで終わりにしたいと思います。

書評をいただいた後の報告

杉本 星子, 小林 大祐, 西川 祐子

高度成長研究会でわたしたちが編集した『京都発！ニュータウンの「夢」たてなおします一向島からの挑戦』（昭和堂, 2045年）の書評をしていただきありがとうございます。

ニュータウンは高度経済成長期の世界各地、日本全国で数多く建設され、各地それぞれに特有の発展をとげるとともに、共通の困難な問題をかかえて現在にいたっています。1970年代から設立がつづいたいわゆる新設大学の多くは京都文教大学が向島ニュータウンとグリーンタウン填島に隣接していると同じく、郊外のニュータウンの中あるいは近くに位置し、ニュータウンとともに発展しています。早くもオールドタウン化が指摘されるニュータウンとおなじく、かつて新設大学と呼ばれた研究教育機関もまた、成熟期をむかえるとほぼ同時に各種変革の必要にせまられています。わたしたちは大学新設の当時からニュータウンの住民とともに生き、交流し、共同研究を行い、たがいに変化、成長してきました。高度成長研究会ではこの本を、ニュータウンを生きる記録として読み、住宅の個人史などの記録の集積や分析方法に評価をいただきました。ありがとうございます。

ニュータウンは計画都市であり、最初の計画はコンクリートでつくられるハード設計で表現されます。その後、設計変更が困難な高層集合住宅のコンクリート躯体のなかで変化する時代と環境を生きる工夫は住民にまかされます。今回いただいた、本書には空

間設計の展望がない, 行政の姿が見えないという二つのご批判は適切です。そのとおりなのです。

ニュータウンの設立主体は, 建設がすむと姿をかくします。住民はそこに暮らすなかで明らかになった設計不具合の修正や建て替え, 規則の緩和や変革など各種の要望をまとめてUR, 区役所, 市役所, 住宅供給公社・・・を巡りますが, 次の窓口へ行けと言われて。その窓口においても次の窓口を教えられます。それをくりかえすうちに振出しにもどる。何度くりかえしたことか。この本に書いた住民主体の各種プロジェクトや運動は, 皮肉にも長年のお役所窓口めぐりと行政からの度重なる拒否によって生まれたと言うべきかもしれません。ハードな部分の変革案が拒否されても, ほかではなくここで生き続けなければならない住民たちは, ソフトな部分, 各人の創意工夫と互いのネットワークづくりによって生きてきました。しかしその限界は目にみえています。だからこそ, わたしたちの発信を, 空間設計の展望がない, 行政の姿がみえないという適切な批判の形で受け止めていただいたことが, 編者にとり最大の喜びです。

第7章に部屋から出ることの難しい障がいをもつ人が, 隣人たちとの共領域, さらに公領域さえも私領域によびこんで皆と一っしょに前向きに生きる例があります。コメントでは閉じこもった部屋から声をあげることの難しい, 自主的ネットワークさえ手をさしのべることの難しい存在に注目をいただき, しだいに老いて無力になる住民たちの意志を尊重しながら, そこによりそう社会福祉が必要というご助言をいただいたのがとくにありがたかったです。

本書による発信の後, 向島ニュータウンでは, つぎのような展開がつづいていることを報告して高度成長研究会にたいする感謝の辞にかえさせていただきます。一つは, 平成27年2月22日に, 向島ニュータウンの住民と河北新報, 京都新聞, 京都文教大学が連携して, 災害時要支援者支援を考える防災ワークショップ「むすび塾」を実施したことです。当日は, それまで自治会主催の防災訓練に参加したことがなかった障がい者, 中国帰国者, 外国人留学生が主役となり, 隣人や学生サポーターの助力を得て災害時の避難をシュミレーションし, 東日本大震災被災者の体験談を参考に, 要支援者のサポートについて議論をしました。巨椋池干拓地という立地条件をもつ地域にとっては水害を想定して考えることが重要なのですが, 今回のワークショップをやってみると水害際にはニュータウンの高層建築が, 周辺住民にとってもほとんど唯一の避難所となるのが改めてわかりました。ニュータウンを地域にむけて開き, 周辺地域はニュータウンを自分たちの地域として考えることが始まりそうです。

二つ目は、私たちが長年とりくんできた子どもの学習会やキッズキッチンなどから始まった困窮家庭の子どもたちへの支援活動が本格化しています。事態が深刻の度をふかめているからです。また、夏休み頃には、伏見区青少年活動センターと組んで、対象を中学生に拡大した企画を実施する計画もあります。子どもの問題は、ニュータウンの次世代を育成する、将来の夢への取り組みでもあります。

三つ目は、平成27年3月16日に、京都文教短期大学・京都文教大学が、京都府と地域の活性化に向けて連携・協力する包括協定を締結したことです。また、京都市住宅供給公社も、向島ニュータウンの住民と学生たちのまちづくり活動をサポートしてくれるようになりました。向島ニュータウンのまちづくりにも、ようやく行政や公社の姿がみえるようになってきたようです。

四つ目に、京都文教大学のニュータウン研究会は、今年度から学内の人間学研究所から同じく学内の地域協同研究教育センターに所属が移りました。同センターは、京都文教大学のCOC事業「京都府南部地域ともいき(共生)キャンパスで育てる地域人材」(事業期間：平成26年度～平成30年度)を推進しています。これを機会に、今回の研究会でみなさまからいただいた貴重なコメントやご批判を生かして理論的であると同時に実践的なニュータウン研究をつづけたいと思います。感謝。